

「人生の『にがり』(苦汁)一万事が益となる」

ローマの信徒への手紙 8章28節

聖学院大学 大学チャプレン・政治経済学部チャプレン 菊地 順

昨日から、2017年度の授業が始まりました。そして、今日から、全学礼拝も始まりました。皆さんの中には、1年生の方もおられ、初めて全学礼拝に出席された人たちも多いと思います。この礼拝は「全学礼拝」と呼ばれていますが、それは、この礼拝が、このキャンパスに集うすべての学生と教職員に開かれた礼拝であるからです。またそのみならず、地域の方々にも開かれた礼拝が、この全学礼拝となっています。この礼拝では、ここに集うすべての人たちが、学生も教職員も、等しく神を見上げ、神の前にへりくだり、聖書と奨励を通して神のみ言葉を聞き、賛美と祈りを捧げます。そうした仕方で神を礼拝するのが、この全学礼拝です。それは、人間にとって最も大切なこと、そしてまた、最もふさわしいことと、わたしたちは考えています。それは、一言で言えば、神を第一とすることです。最近、ノーベル平和賞を受賞したマララさんの語った「エデュケーション・ファースト(教育第一)とか、アメリカのトランプ大統領の語った「アメリカ・ファースト」(アメリカ第一)という言葉に倣って、「何々ファースト」という言葉が流行していますが、それに倣って言えば、それは「ゴッド・ファースト」、神を第一とする生き方・考え方です。

これは、今までの皆さんの生き方・考え方とは大いに異なるのではないのでしょうか。おそらく、今までは、自分が第一であったのではないのでしょうか。自分のことが一番大切であり、自分を中心に世界が回っていたのではないのでしょうか。しかし、この礼拝では、何よりも神が第一なのです。そして、この聖学院大学も、神を第一としている大学なのです。そしてまた、それが、今日皆さんと一緒に紐解いているこの聖書の世界であり、またキリスト教の世界なのです。

これは、皆さんにとっては、おそらく、コペルニクス的転換をもたらすことになるのではないかと思います。コペルニクスは、それまでの常識であった地球中心説に対して、太陽中心説を唱えました。それまでは、地球を中心に宇宙が回っていると考えていたのに、宇宙は太陽を中心に回っていると唱えたのです。それは、人々のものの見方を根本から変えることになりましたが、おそらく、皆さんが、これから礼拝を通して出会う世界は、皆さんの世界観を根本から変えるものだと思います。そこには、皆さんが今まで出会ったことのない新しい価値、新しい世界があると思います。そして、そうした新しい価値、新しい世界に、是非目を見開いて注目して欲しいと思います。なぜなら、そこには、人を本当に生かす世界があるからなのです。

ところで、話は大きく変わりますが、皆さんは「にがり」という言葉をご存じでしょうか。普段はあまり耳にしない言葉ですので、知らない人も多いかもしれませんが、「にがり」とは、豆腐を作るときに、それを固めるために用いるものです。ご存知のように豆腐は大豆から作られますが、砕いた大豆に水を入れて温め、それを布でろ過すると豆乳ができます。そして、その豆乳を固めたものが豆腐となるわけです。

が、それを固める時に用いるのが「にがり」です。「にがり」は、元々は海水から作られたもので、海水から食塩となる塩化ナトリウムを取り除いたものが「にがり」です。こうした「にがり」が、豆腐を作るのに役立つということを発見したのは、正に生活の知恵であると思いますが、今日は、この「にがり」について、少しお話ししたいと思います。

実は、わたしは以前、ある大きな論文を書いているとき、ある人から、論文を書く上で大切なのは「にがり」ですよ、と言われたことがあります。そのとき、わたしは、ある思想家の思想をまとめようとしていましたが、そのために大切なのは、「にがり」だと言われたのです。というのも、一人の思想家であっても、その思想はしばしば多岐にわたるため、それをまとめるには、その全体を結び合わせる凝固剤、すなわち「にがり」が必要であったからです。わたしは、それ以後、事あるごとに、この「にがり」ということを考えるようになりました。そして、次第に、この「にがり」というのは、そうした論文や本を書く時に必要なだけでなく、わたしたち一人ひとりの人生にも必要なものではないのかと思うようになったのです。また、必要であるというだけでなく、むしろ、そうした「にがり」が、すでにわたしたちの人生にあって、いつのまにかその「にがり」をめぐって人生が形作られているところがあるのではないのかと思うようになりました。

わたしたちの人生は、特に若い時は、まだまだ漠然としていて、どの方向に向かって進んでいくか分からない状態にあります。しかし、それが次第にある方向を取り、何らかの形を作り始め、段々と人生の形を整えて行くのではないのでしょうか。そして、そこには、何らかの「人生のにがり」とも呼べるものがあるように思うのです。しかも、その「にがり」は、初めは必ずしもプラスとは思えないものかもしれません。むしろ、マイナスとも思えることが、しばしば「人生のにがり」となっていくのではないのかと思うのです。

「にがり」とは、漢字で書きますと「苦汁」(くじゅう)と書きます。それは、「苦い汁」という意味で、しばしば「苦汁を嘗める」などという表現で用いられる言葉です。それは、「苦い」のです。決して、甘いものではありません。そのため、それは、しばしば自分の人生から捨ててしまいたいようなものなのです。それは、人生における痛みであったり、苦悩であったりするものなのです。「これさえなければ、自分は幸せなのに」と思えることなのです。しかし、そういう苦汁が、しばしば人の人生を築いていく上で重要な働きをすることになるのではないのかと思うのです。そして、人生を振り返ったとき、この苦汁がなければ、自分はこうした人生を送ることはできなかつたであろうと、それをむしろ肯定的に受け止めることもできるようになるのです。そうした「にがり」が、人生にはあるのではないのでしょうか。そして、多かれ少なかれ、そうした「にがり」を、誰もが心のどこかに持っているのではないのかと思うのです。

それは、もしかすると、劣等感であったり、大きな失敗であったり、生まれながらの環境であったり、突然の不幸であったり、あるいは自分の性格であったりと、それは人それぞれ異なると思います。しかし、その痛みや傷はなかなか取り除くことはできないものではないのでしょうか。それどころか、それは深く自分の人生に突き刺さり、抜き差しならぬものとなっていくのです。しかし、そのとき、大切なのは、それとどう向き合うかではないかと思います。いやだいやだと言って逃れようとするのか、それとも、それに向かって前向きに取り組もうとするのか、そこで人生は大きく分かれると思います。そして、その違いは、どういう世界観を持つかで大きく変わるのではないのでしょうか。

今日の聖書箇所には、こういう言葉が記されています。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従っ

て召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」。このローマの信徒への手紙を書いたパウロという人は、「万事が益となるように共に働く」と語るのです。「万事」とは、すべてという意味です。良いことも悪いことも、すべてのことが共に働いて、益となると言うのです。これは、非常に前向きな考え方ではないでしょうか。そして、それ以上に、非常に楽観的な考え方ではないでしょうか。

ところで、パウロはなぜそう言い得たのでしょうか。その答えは、初めの言葉にあります。すなわち、パウロは「神を愛する者たち」と語りますが、神を愛する者たちとは、神の愛を知ることによって、神を愛し、神に信頼する者たちのことです。聖書は、神は、わたしたち一人ひとりを掛け替えのない存在として愛され、その全存在を、その生涯に渡って愛し通される方であると語っています。この神の愛の中に生かされていることを知るとき、わたしたちの世界観は大きく変わるのです。そして、パウロと共に、神の愛の中にあっては、「万事が益となるように共に働く」と語ることができるようになるのです。しかも、わたしたちにとって、当初は喜ばしくないと思えたことも、万事が益となることに不可欠な要素として、しかも、その大切な要素として働いていくことを知るのである。そのようにして、それは、正に「人生のにがり」となり、一人ひとりの人生を、豊かな意味のある人生へと変えて行くのです。

神の愛の中にあっては、「万事が益となって働く」、今日は、是非この言葉を心に留めていただきたいと思います。そして、もし、今、心のどこかに痛みや悩みを抱えているとしても、それは、決してそのままでは終わらないこと、それどころか、それは、これからの皆さんの人生を豊かに作り上げて行く上で、大事な「人生のにがり」ともなっていくことを知っていただきたいのです。そして、そのためにも、特にこの礼拝を通して、神の愛を知り、その神の愛に自分の人生を委ねる大切さを知ってほしいと思います。

皆さんの新年度の歩みの上に、神様の祝福を心よりお祈りいたします。

2017年4月11日 聖学院大学 全学礼拝